

## 第二次選定の検討対象種に係る情報

ナミハリネズミ ( <i>Erinaceus europaeus</i> )、マンシュウハリネズミ( <i>E. amurensis</i> )	1
キタリス ( <i>Sciurus vulgaris</i> )	3
シマリス ( <i>Tamias sibiricus</i> )	5
タイリクモモンガ ( <i>Pteromys volans</i> )	7
アメリカミンク ( <i>Mustela vison</i> )	8
外国産シカ属 ( <i>Cervus</i> )	10
シリアカヒヨドリ ( <i>Pycnonotus cafer</i> )	12
インドクジャク ( <i>Pavo cristatus</i> )	14
リスザル ( <i>Saimiri sciureus</i> )	16
フェレット ( <i>Mustela furo</i> )	17
外国産メジロ(ヒメメジロ: <i>Zosterops japonicus simplex</i> など)	19

# ナミハリネズミ (*Erinaceus europaeus*)、マンシュウハリネズミ(*E. amurensis*)に関する情報

原産地と分布： 中央ヨーロッパ、中国

定着実績： 静岡県、神奈川県などで定着

被害の実態・被害のおそれ

生態系に係る被害

- 鳥類の卵・雛、又は昆虫類等を捕食する。
- 国内には地表を徘徊する肉食哺乳類が少ないために、昆虫類等を捕食することにより直接的、間接的な影響は大きいと考えられる。
- 海外ではチドリ亜目(Cahadrii)などの鳥類を捕食するなど、特に地上で繁殖する鳥類に対しての影響が報告されている。

被害をもたらす要因

(1)生物学的要因

- 一般的には、地上性の無脊椎動物(主に昆虫など)を捕食するが、鳥類などの小型の動物であれば様々な脊椎動物を捕食することも可能である。

(2)社会的要因

- 愛らしい外見から、ペットとして重用され、比較的多くの個体が流通しており、それらの個体が逸出し、または遺棄されたことにより、国内で定着したと考えられる。

特徴ならびに近縁種、類似種について

- 体重は 600g ~ 700g 程度であり、背中部分に 2 ~ 3cm の針がある。
- 同属には、*E.concolor*(ヒトイロハリネズミ)が含まれる。
- 他の属では、*Atelerix* 属(アフリカハリネズミ)が多く流通しており、特にヨツユビハリネズミが多く流通している。ハリネズミの仲間は 14 種ほどが中国からアフリカ大陸にかけて広く分布する。

その他の関連情報

- 国内には既に多種のハリネズミが流通していると思われる。
- 夜行性のために目撃事例などは少ないが、それなりの数が定着していると推定される。
- ヨーロッパ原産のハリネズミは、日本の冬にも対応が可能である。アフリカ産種であって

も亜熱帯地域などでは十分に定着できる可能性がある。

#### 主な参考文献

- (1) Landcare Research (2003) A prickly whodunit: Predation by hedgehogs on native fauna, Kararehe Kino Vertebrate Pest Research, Issue 2:1-3.
- (2) Long, J.L. (2003) Introduced Mammals of the world. CABI Publishing, 589p.
- (3) The importance of the introduced hedgehog (*Erinaceus europaeus*) as a predator of the eggs of waders (Charadrii) on the machair in South Uist, Scotland, Biological Conservation, 93:333-348.
- (4) Jackson, D. B. (2001) Experimental removal of introduced hedgehogs improves wader nest success in the Western Isles, Scotland. Journal of Applied Ecology 38: 802-812.

## キタリス (*Sciurus vulgaris*)に関する情報

原産地と分布： ユーラシア大陸(イギリスから日本にかけて)

定着実績： エゾリスは固有亜種。

狭山丘陵などで拾取されたリスが外国産キタリスである可能性が強い。

被害の実態・被害のおそれ

生態系に係る被害

- エゾリスと亜種間交雑する。また、ニホンリスとも遺伝的には近縁であるために捻性雑種の形成が予測される。
- 導入された地域では、捕食などによる直接、または間接的な植生への影響も懸念される。

農林水産業に係る被害

- 林業被害(樹皮剥ぎ)が海外で報告されている。

被害をもたらす要因

(1)生物学的要因

- 大陸に広く分布しているため、日本の気候にも適していると考えられる。
- 自然界での亜種間交雑については、現状では定かでないが、野外に大量に定着すれば、常に交雑の危険性はある。

(2)社会的要因

- ペットとしてかなりの量が流通しており、放棄、または逸脱個体が定着する可能性がある。

特徴ならびに近縁種、類似種について

- 頭胴長 22～27cm、尾長 16～20cm、体重が 300～410g 程度
- 本種を含め、リス属(*Sciurus*)は 28 種がアジア、ユーラシアに分布している
- 同属のアカハラハイイロリス (*S.aureogaster*)により、アメリカでトウモロコシ被害などが報告されており、フロリダ半島で野生化した事例がある。

その他の関連情報

- 樹皮被害、電線をかじるなどの被害が生じる可能性がある。
- 家畜伝染病(ペストなど)を媒介する。*Ornithodoros* spp. (ダニ)による回帰熱なども媒介する。
- 教育や愛玩の目的で、公共施設、個人、民間施設等で多数の個体が飼育されているが、

その実態を把握するのは困難である。

- 飼育、繁殖が比較的容易であるために、大量に輸入される可能性がある。
- 大陸産の亜種をエゾリスとして販売されていることがある。
- 森林性であるが、都市公園などでも強い生存率を有する。
- 逸脱すれば、再捕獲は難しい。
- エゾリスとの亜種間の区別は外見では困難である

#### 主な参考文献

- (5) Long, J.L. (2003) Introduced Mammals of the world. 589pp. CABI Publishing
- (6) Oshida, T and Matsuda, R. (2000) Phylogeny and zoogeography of six species of genus *Sciurus*, inferred from cytochrome b gene sequences, *Zool. Sci.* 17:405-409.
- (7) National Biological Information Infrastructure(NBII), (2002) Invasive Species Information Node, non-native mammals in the U.S. and Canada, [http://invasivespecies.nbi.gov/speciesinfo/mammal\\_list.html](http://invasivespecies.nbi.gov/speciesinfo/mammal_list.html).
- (8) 田村典子 (2001) ニホンリスの保全ガイドラインづくりに向けて, *哺乳類科学* 41:137-148.

## シマリス (*Tamias sibiricus*)に関する情報

原産地と分布： ロシア、中国、朝鮮半島、日本

定着実績： 複数の亜種が定着している可能性が示唆されている。

被害の実態・被害のおそれ

生態系に係る被害

- 我が国の固有亜種エゾシマリス (*Tamias sibiricus orientis*) と亜種間交雑する。
- 導入された地域では、捕食などによる直接、または間接的な植生への影響も懸念される。

被害をもたらす要因

(1) 生物学的要因

- 大陸に広く分布しているため、日本の気候にも適していると考えられる。
- 自然界での亜種間交雑については、現状では定かでないが、野外に大量に定着すれば、常に交雑の危険性はある。
- 主に地上で採食などの行動をするが、樹上も重要な生息環境であり、様々な環境を利用している。

(2) 社会的要因

- 愛らしい外見からペットとして最も流通量の多いリスである。
- チョウセンシマリス (*T. s. barberi*) は観光目的での放獣、ペットの放棄、個体の逸脱などで定着した可能性が指摘されている。
- リス(他のリス科動物を含む、プレーリードックは除く)は、2003 年度には、37,919 匹が輸入された実績を持ち、その多くの輸入元が中国であることから、シマリスの輸入量は非常に多いと推定される。

特徴ならびに近縁種、類似種について

- 頭胴長 12～15cm、尾長 11～12cm、体重 70～115g 程度。茶色。背中に 5 本の黒い縞模様があり、腹は白い。
- 本種を含め、シマリス属 (*Tamias*) は 25 種がアジア、アメリカに分布している。
- チョウセンシマリスはエゾシマリスより、やや赤みが強いとされる。

その他の関連情報

- 飼育、繁殖が比較的容易であるために、大量に輸入される可能性がある。

- 人馴れするリスであり、森林と地上に適した生活能力を有し、都市公園などでも強い生存率を有する。
- 野外に逸出すれば、再捕獲は難しい。
- 北海道以南では外来種としてシマリスは狩猟鳥獣に指定されているが、北海道では在来種がいるため捕獲禁止になっている。
- 海外では、タウンゼントシマリスが野生化した事例がある。

#### 主な参考文献

- (9) Long, J.L. (2003) Introduced Mammals of the world. 589pp. CABI Publishing
- (10) Oshida, T and Matsuda, R. (2000) Phylogeny and zoogeography of six species of genus *Sciurus*, inferred from cytochrome b gene sequences, *Zool. Sci.* 17:405-409.
- (11) National Biological Information Infrastructure(NBII), (2002) Invasive Species Information Node, non-native mammals in the U.S. and Canada, [http://invasivespecies.nbi.gov/speciesinfo/mammal\\_list.html](http://invasivespecies.nbi.gov/speciesinfo/mammal_list.html).
- (12) 田村典子 (2001) ニホンリスの保全ガイドラインづくりに向けて, *哺乳類科学* 41:137-148.
- (13) US.National Park Service, <http://www.nature.nps.gov/biology/ipm/manual/ticks.htm>
- (14) 自然環境研究センター(1998) 野生化哺乳類実態調査報告書、161pp.

## タイリクモモンガ (*Pteromys volans*)に関する情報

原産地と分布： 北ヨーロッパから中国などまで広範囲

定着実績： エゾモモンガ (*P.v orii*) は亜種。国内での定着については不明。

被害の実態・被害のおそれ

生態系に係る被害

- 亜種エゾモモンガとの交雑が懸念される。

被害をもたらす要因

(1) 生物学的要因

- エゾモモンガと亜種間交雑する。ただし、自然界での亜種間交雑については、現状では定かでない。
- 逸脱すれば再捕獲が非常に困難な種である。

(2) 社会的要因

- ペットとして一部で流通している。

特徴ならびに近縁種、類似種について

- 体長は15～20cm。尾長が10～12cm程度。夜行性で滑空するために、飛膜がついている。
- 別属のアメリカモモンガ (*Glaucomys volans*) もペットとして流通している。

その他の関連情報

- フクロモモンガ(有袋類)、アメリカモモンガ、タイリクモモンガの3種がモモンガとして販売実績があるが、本種のみ交雑の危険性はある。

個人の飼育下などでは繁殖は難しいとされる。

主な参考文献

(15) 日本生態学会(編) (2002) 外来種ハンドブック 地人書館, 390pp.



## アメリカミンク (*Mustela vison*) に関する情報

原産地と分布： 北アメリカ一帯 (アラスカ、カナダを含む)

定着実績： 北海道の広範囲に分布。全道に分布するが、海岸部をはじめとする水辺に多く、山地には少ない。野生化の時期は不明だが、1950 年代後半から逸脱した個体による野生化が始まり、1960 年代中頃には定着したと考えられる。

被害の実態・被害のおそれ

生態系に係る被害

- 哺乳類、鳥類、甲殻類など様々な生物を捕食する。
- 水鳥などに対して特に強い捕食の影響があると指摘されている。

被害をもたらす要因

(1) 生物学的要因

- 繁殖力が旺盛で、成体は毎年繁殖すると推定される。
- 水辺での生息を特に好む。
- 在来生物に対する捕食能力が高く、本種は分布拡大能力にも優れている。
- 我が国に本州を捕食する天敵は存在せず、一方で在来のイタチ類と競合する可能性がある。

(2) 社会的要因

- 毛皮の生産目的で導入される。1866 年にアメリカで人工養殖に成功し、人工的な飼育が進み、毛色、毛質が改良された。
- 日本のミンク飼育は 1928 年、カナダ (アメリカともされる) から雌雄各 2 頭のミンクを北海道に輸入して飼育試験を開始したのが始まりとされる。
- 最盛期には国内に 400 件程度のミンク飼育施設があったとされが、現在は北海道、新潟県などに数件の飼育場が存在するのみとなった。

特徴ならびに近縁種、類似種について

- 雄：頭胴長 45cm、尾長 36cm、体重 1kg。雌：頭胴長 36cm、尾長 30cm、体重 0.7kg。毛色は通常は黒いが、飼育技術によって、プラチナ、バイオレット、パステルなどの毛色タイプに区分されている。
- ヨーロッパミンク (*Mustela lutreola*) は、ヨーロッパで個体数が減少している。

その他の関連情報

- ミンクコートの一着の作成に 35 頭程度のミンクが必要とされる。
- その数は減少したが北海道、新潟などに飼育施設が存在する。
- ミンク供養碑(鹿部町) の「ミンク飼育史」によれば 330 頭でミンク養殖事業を開始し、最多飼育数は 13,000 頭で一村一品運動の先駆と注目されたが、経済変動によって昭和 62 年に事業の幕を閉じている。

#### 主な参考文献

- (16) 北海道生活環境部自然保護課 (1985) 野生動物分布等実態調査報告書-野生化ミンク-, 北海道生活環境部自然課
- (17) Ferreras, P. and Macdonald, D. W. (1999) The impact of American mink *Mustela vison* on water birds in the upper Thames, *J. Applied Ecology*, 36(5):701-708.
- (18) Long, J.L. (2003) *Introduced Mammals of the world*. CABI Publishing, 589p.
- (19) Norodstorm, M., Hogmander, J., Laine, J., Nummelin, J., Laanetu, N., and Korpimaki, E. (2003) Effects of feral mink removal on seabirds, waders and passerines on small islands in the Baltic Sea, *Biol. Conservation*, 109:259-368.
- (20) Hammershøj, M., (2004) Population ecology of free-ranging American mink *Mustela vison* in Denmark. PhD thesis National Environmental Research Institute, Kalø, Denmark. 30 pp.

## 外国産シカ属 (*Cervus*) に関する情報

原産地と分布： ユーラシア大陸、北アメリカなど

対象となる種 (Macdonald による) 8 種 (分類系統によって種記載は様々)

*C. albirostris*, *C. duvanceli*, *C. elaphus*, *C. canadensis*, *C. eldi*, *C. timorensis*, *C. unicolor*, ならびに *C. nippon nippon* など日本固有亜種を除く外国産 *C. nippon*

定着実績： ニホンジカ亜種のタイワンジカ (*C. nippon taiouanus*)、マリアナジカ (*C. mariannus*) が近年までに和歌山、小笠原で野生化した報告はある。

被害の実態・被害のおそれ

生態系に係る被害

- 在来のニホンジカと種間、または亜種間交雑する。
- 特に海外では、ニホンジカを導入したことによって、在来のアカシカと交雑した事例が多い。
- 大型の草食動物で定着すれば植生構造を著しく変化させる。
- アカシカは世界各国に導入され、食圧による直接または間接的な植生への影響が報告されている。

農林水産業に係わる被害

- 森林部などで採食による農林業被害を引き起こす可能性がある。

被害をもたらす要因

(1) 生物学的要因

- アカシカなどはニホンジカより遥かに大きくなる大型のシカである。
- 本属に含まれる種は、熱帯から寒帯まで生息可能な種類が含まれている。
- イギリスでは、在来のアカシカと外来ニホンジカの交雑が進み、遺伝的な攪乱が大きな問題となっている。

(2) 社会的要因

- 国内でも養鹿産業によって飼育されている可能性がある。
- 世界各国に狩猟目的で導入されて農林業被害等が問題となっている。

特徴ならびに近縁種、類似種について

- 体重が 75kg ~ 509kg で黄茶色、濃茶色の毛皮に覆われている (アカシカ)。
- ニホンジカと類似した形態も持つものが多い (幼体は白色のスポットがあるなど)。
- *Dama*, *Axis* 属を同属にする研究者も僅かながら存在する。

#### その他の関連情報

- ニュージーランド、パタゴニアなどで大きな問題となっている(アカシカ)。
- 管理、駆除に対し、ニュージーランドでは、年間 50 億円以上の負担を必要としている(アカシカ、ニホンジカ)。
- ロシア、オーストラリアなどにも既に導入されて問題となっている。
- サンバー(*C. unicolor*)、ルサジカ(*C. timorensis*)などがオーストラリアで野生化している。ホックジカ(*C. porcinus*)もオーストラリア野生化している。
- 国内でのニホンジカ問題と同様に、狩猟圧が下がった各国では、その個体数が増大し、結果として様々な農林業被害を生じている。
- 森林性であるが、アカシカなどは都市公園などでも強い生存率を有する。

#### 主な参考文献

- (1) Harrington, R. (1973) Hybridization among deer and its implications for conservation. *Ir. For. J.* 30:64-78
- (2) Harrington R. (1982) The hybridization of red deer (*Cervus elaphus* L. 1758) and Japanese sika deer (*C. nippon* Temmink 1838). *Trans. Int. Cong. Game Biol.* 14: 559-571.
- (3) Lowe, V.P.W. and Gardiner A.S. (1975) Hybridization between Red deer (*Cervus elaphus*) and Sika deer (*Cervus nippon*) with particular reference to stocks in N.W. England. *J. Zool.* 177:553-566.
- (4) Extent and impact of selected ecologically significant invasive species  
<http://www.nrm.gov.au/monitoring/indicators/pubs/vertebrate.pdf>

## シリアカヒヨドリ (*Pycnonotus cafer*)に関する情報

原産地と分布： 東南アジア

定着実績： 我が国での確認報告事例はなく定着していない。

被害の実態・被害のおそれ

生態系に係る被害

- 我が国に定着すれば、在来のカヒヨドリを含む鳥類と競合するおそれがある。

農林水産業に係る被害

- オーストラリア、太平洋諸国などで様々な野菜、果物などの農作物に食害を与えている。
- トマトなどの果菜類、キャベツなど葉・花菜類、さらに根菜類、果樹類に至るまで様々な農業作物に被害をあたえている。

被害をもたらす要因

(1) 生物学的要因

- 新たに導入された地域への環境適応能力が高いと示唆されている。
- 農耕地、森林域、都市部まで様々な環境で生息が可能とされる。
- 年間を通じて繁殖が可能である。

(2) 社会的要因

- 東南アジアからの大型の輸送物資(貨物コンテナ)に紛れて、太平洋諸国などに侵入したと考えられている。

特徴ならびに近縁種、類似種について

- 体長 20～30cm 程度。全体に黒みがかったが、尻から腹にかけての赤い羽毛が特徴的である。

その他の関連情報

- シリアカコウラウン、クロコウラウンとも呼ばれることがある。
- アメリカでは輸入が禁止されている。

主な参考文献

(1) Department of Agriculture - Western Australia;

<http://www.agric.wa.gov.au/agency/pubns/infonote/vprs/rvbulbul.htm>

- (2) Meyer, J. Y. (2000) Invasive plants in the Pacific Islands. In: The Invasive Species in the Pacific: A Technical Review and Draft Regional Strategy. Sherley, G. (tech. ed). Published in June 2000 by the South Pacific Regional Environment Programme (SPREP). 197pp.

## インドクジャク (*Pavo cristatus*) に関する情報

原産地            インド、スリランカ、パキスタン、バングラデシュなど

定着実績            沖縄諸島では、小浜島(約 400 羽)、石垣島(約 90 羽)、黒島(約 50 羽)、宮古島(約 40 羽)、新城島(約 25 羽)、伊良部島(数羽)などで野生化し、繁殖もしている。西表島にも、小浜島から飛来する個体がある。

### 被害の実態・被害のおそれ

#### 生態系に係る被害

- クジャクが高密度で生息している小浜島では、トカゲ類などの小動物が激減しており、クジャクによる捕食による被害が懸念されている。

#### 農林水産業に係る被害

- 一部で農作物に対する食害がある。

### 被害をもたらす要因

#### (1) 生物学的要因

- 大型の鳥類(オスの体重 4 ~ 6kg、メスは 2.75 ~ 4kg)で、植物の果実、種子、葉、根茎などや、小型の哺乳類、鳥類、両生爬虫類、昆虫など多様な動植物を、主に地上と地面を掘って食べる。農作物も食べる。少数個体の群れで採食する。

#### (2) 社会的要因

- 姿が美しいために学校、公園施設などで飼育されることが多い。先島諸島では、観賞用に飼育されていた個体が逸走して定着したとされる。
- 集団で、また放し飼いにされている事例が多く、台風等による檻や柵の損壊が飼育施設からの逸失の原因となる。

### 特徴ならびに近縁種、類似種について

- メスは地味であるが、オスは非常に発達した上尾筒(腰の部分の羽毛)を有し、成鳥で長さ約 1.5m、全長は 2.3m、体重 6kg にもなる。上尾筒は繁殖期が終わると毎年、換羽する。
- マクジャク(*P. muticus*)は、インドネシア、マレーシアなどに分布する。

### その他の関連情報

- 原産国では、一部の農耕地で穀物なども採食するが、宗教上の理由で保護されている。
- アメリカ、オーストラリア等でも野外に定着している。ただし生態系被害、農業被害などに関する報告はない。

- 先島諸島の野生個体は、リゾート施設、小学校などから飼育個体が逸出したものと考えられる。
- 飼育下繁殖は比較的容易であり、国内で増殖された個体が譲渡され多数飼育されている。
- 交配用に少数であるが輸入はある。
- 小浜島と西表島では、野生個体の駆除作業が実施されている。少数個体が小浜島から飛来する西表島では、駆除の成果が得られている。小浜島での野生根絶が達成されるまで、作業の継続が必要である。
- 公園施設、学校等で多数が飼育されているが、飼育施設の分布や飼育下の個体数などの把握は困難である(例:埼玉県では、小中学校 1113 校のうち、59 校でクジャクを飼育している)。
- 定着に係る報告はあるものの生態系や農林水産業に与える被害に係る調査研究事例は少ない状況にある。

#### 主な参考文献

- (21) Eguchi, K. and Amano, H.E. (2004) Invasive birds in Japan, *Global Environmental Research*, 8:23-28.
- (22) Eguchi, K. and Amano, H. E. (2004) Spread of exotic birds in Japan, *Ornithological Science*, 3:3-12.
- (23) Long, J. L. (1981) *Introduced Birds of the World*, Reed, Wellington, 528p.
- (24) 田中聡・髙原健二 (2003) 先島諸島における野生化したインドクジャクの分布と現状について, *沖縄県立博物館紀要*, 29:19-24.
- (25) Hoyo, J. del, Elliott, A, and Srgatal J. (1994). *Handbook of the Birds of the World Vol.2, Bird Life International*, Lynx Editcion, Barcelona: 551.



## リスザル (*Saimiri sciureus*)に関する情報

原産地と分布： 中南米諸国

定着実績： 伊豆大島で野外で個体が高頻度に確認されている事例がある。

被害の実態・被害のおそれ

生態系に係る被害

- 昆虫などの小動物を主食とし、鳥の卵なども捕食する。

被害をもたらす要因

(1) 生物学的要因

- 熱帯原産であるながらフロリダ半島などで野生化した事例があり、国内でも温暖な地域では多数の個体が導入されれば定着する可能性がある。

(2) 社会的要因

- 国内外で観光資源として様々な地域で導入されてきた。

特徴ならびに近縁種、類似種について

- 頭胴長 30～35cm 程度。頭胴長と同じ程度の長い尾を持つ。

その他の関連情報

- 他のサル(新世界猿)には致死性であるウィルスのヘルペスタマリヌスを媒介する(リスザルは無症状)。
- 実験動物としても輸入される(最近では、ほとんどがペット飼養であり、実験動物での利用は減少している)。
- 感染症法の改正により、愛玩目的での輸入は禁止される予定である。
- 教育や愛玩の目的では公共施設、個人、民間施設等で飼育されているが、その実態が十分に把握されていない。
- 生態系への影響に関しても報告事例は非常に少ない。

主な参考文献

(26) Long, J.L. (2003) Introduced Mammals of the world. CABI Publishing, 589p.

## フェレット (*Mustela furo*)に関する情報

原産地と分布： ヨーロッパケナガイタチ (*M. putoriusfuro*) を改良して家畜化したもの

定着実績： 野外での発見事例はあるが、定着については不明。

被害の実態・被害のおそれ

生態系に係る被害

- 海外では、野外に定着した個体が小型の哺乳類、鳥類など様々な動物を捕食している。

被害をもたらす要因

(1) 生物学的要因

- 餌資源に対する選好性が少なく、様々な小動物を捕食する。

(2) 社会的要因

- 最も人気のあるペット哺乳類の一つで、国内外でも多数飼育されている。
- 2003年度の統計によれば、22,069匹が輸入されている。

特徴ならびに近縁種、類似種について

- 雄の体長 40～50cm、体重 1.5～2.5kg 程度。雌は体長 35～45cm、体重 0.75～1.5kg 程度。
- 毛色の違いにより様々な販売名にて流通している(プラチナ、パタースコッチ、セーブルなど)。

その他の関連情報

- 雌は発情期になっても交尾がおこなわれないとエストラス症により致命的な影響を受ける。
- ほとんどのフェレットは、去勢・不妊、臭腺削除手術を実施しており、国際フェレット協会の証明書が付いて販売されている。
- アメリカでは州によりフェレットを家畜として認めている。ただし州によっては有料の飼育証明書を発行し、去勢を義務付けるなどもしている。
- ニュージランドでは、(海外への輸出用は認められている可能性があります)ブームが下火になったことから、新たな飼育も禁止するようになった。現在、飼育中の個体も国立公園等への持ち込みは禁止されている。

主な参考文献

- (27) Byrom, A. E. (2002) Dispersal and survival of juvenile feral ferrets *Mustela furo* in New Zealand, J. Applied Ecology, 39:67-78.
- (28) Long, J.L. (2003) Introduced Mammals of the world. CABI Publishing, 589p.
- (29) Norbury, G.L.; Norbury, D.C.; Heyward, R.P. (1998) Behavioral responses of two predator species to sudden declines in primary prey. J. Wild Mgt 62(1): 45-58.
- (30) American Ferret Association, <http://www.ferret.org/news/2004-06-09-a.htm>

## 外国産メジロ(ヒメメジロ: *Zosterops japonicus simplex* など)に関する情報

原産地と分布: 中国南東部、フィリピンのバタン諸島などに分布

定着実績: ヒメメジロなどが野外で繁殖した事例は確認されていないが、野外に逸出している可能性は強い。

被害の実態・被害のおそれ

生態系に係る被害

- 在来種のメジロが、野外で外国産メジロと交雑する可能性が指摘されている。

被害をもたらす要因

(1) 生物学的要因

- 自然界での亜種間交雑については、現状では定かでないが、日本産の固有亜種と交雑するおそれがある

(2) 社会的要因

- 愛玩目的(鳴き合わせなど)で多数が輸入され、大量に流通、飼育されている可能性がある。
- ヒメメジロなどを輸入して、その飼育許可証を悪用して、密漁された国内産種と入れ替えて飼育・販売するなどの行為が報告されている。

特徴ならびに近縁種、類似種について

- ハイナンメジロ (*Z. j. hainanus*)、キクチメジロ (*Z. j. batansis*)、フィリピンメジロ (*Z. j. meyeri*) などを含み、日本原産種と非常に類似するが、羽色、くちばしなどの特徴により識別は可能である。

その他の関連情報

- 中国からの野鳥の輸出は規制されている。
- 国内産のメジロを外国産と偽って飼育するのは鳥獣保護法の違反行為となる。

主な参考文献

- (31) Eguchi, K. and Amano, H.E. (2004) Invasive birds in Japan, *Global Environmental Research*, 8:23-28.
- (32) Mountainspring, S and Scott, JM (1985) Interspecific competition among Hawaiian forest birds. *Ecol. Monogr.* 55: 219-239.
- (33) Reynolds, M.H., R.J.Camp, Nielson and J.D.Jacobi. (2003). Evidence of change in a low-elevation forest bird community of Hawai'i since 1979. *Bird Conservation International* 13: 175-187.

- (34) 永田尚志. (2005/準備中). 侵入種が種多様性におよぼす影響機構の解明に関する研究, 環境省地球環境研究総合推進費終了研究報告書侵入生物による生物多様性影響機構に関する研究平成 12 年度 ~ 平成 15 年度 (2), 24pp.